

山本周五郎『栄花物語』論

目次

- 一 執筆時の状況について
- 二 歴史と文学について
- 三 信二郎、保之助、その子について
- 四 田沼意次について

キーワード…歴史と文学、真実、不合理

島達夫*

* Tatsuo SHIMA 本学文学部教授（人文学科）

一 執筆時の状況について

『栄花物語』は『週刊読売』に一九五三年一月十八日号から九月二十七日号まで掲載された作品である。そのうち八月三十日号は休載であった。同年の一月から『労働文化』に『正雪記』（第一部）を連載し、また、前年の十二月十二日から内外通信社の配信により『四国新聞』に連載していた『風流太平記』^①と併せて、長編小説の『三部興行』であった。『風流太平記』は一九五三年七月十三日まで掲載されるのだが、田沼の後を継いだ松平定信の老中筆頭時代の物語である。河盛好藏氏はこの作品を「徹頭徹尾興味本位で書かれたエンターテインメントの読みものである」とし、「この作者のものとしては残念ながら第一級品というわけにはゆかない」と評している^③。しかし、同時に「作者の空想力の豊かさには感心する。（中略）このような豊かな物語的才能の上に、周五郎文学が築かれていることを人は忘れてはならない^④」とその長所も指摘している。また、水谷昭夫氏は「作品全体の構成のたしかさという点から言えば、娯楽作品の娯楽性というものに徹しつつ、人間と歴史のある肝心をさらりと描いてのけたこの作品の方を、むしろ高く評価すべきである」と前後に書かれた『山彦乙女』や『正雪記』に比較して論じている^⑤。水谷氏の「人間と歴史のある肝心をさらりと描い」という指摘は『栄花物語』においても重要な視点を提供してくれているように思う。

『正雪記』は一年をかけて第一部を完成する。さらに一九五四年十一月号の同じく『労働文化』から翌年の十二月号に第二部を、そして一九五六年八月号から翌年の八月号まで同誌に第三部を連載し、ようやく完結する。この三つの作品を並行して書き進めていたのは注意しておく必要があるように思う。従来から、『栄花物語』と『正雪記』は並べて論じられるのだが、『風流太平記』は発表されたのが地方新聞であり、また、娯楽性を主にした故か、顧みられることが少ない。一九五二年の『よじょう』が周五郎自身も語るように、新たな文章のリズムの獲得により「後半期の道をひらいてくれた」作品である^⑥とく、この三作品を並行して書き続けたことがこれ以降の周五郎の豊饒な作品世界につながる大きな歩みとなったことは間違いない。

たとえば、これら三作品をいささか図式的ではあるが、最も娯楽性が強く、作者が自由に書き進めることのできた

『風流太平記』と、慶安事変という歴史上の事件ではあるが、「これまで一般に信じられてきたものは、殆ど稗史はいし講談のたぐい」であり、「その経歴も明確な記録はない」^⑦ 由井正雪を主人公にした『正雪記』、そして、比較的多くの資料を参考にした『栄花物語』と三つのタイプの作品として分類することも可能だろう。

周五郎は『歴史と文学』^⑧において、「歴史と小説は劃然かくぜんと別個のものだと思う」と明快に自らの立場を語っている。そして、文学は「いつでも人間性を追究する」と言う。これは早くから、「人間を書くのだ、真実の人間が書ければ『面白さ』は附いて来る、簡潔に、的確に、そして生々と鮮やかに。『人間狩』りをもつと沢山しよう」^⑨と記した周五郎の一貫した姿勢であろう。周五郎の小説における面白さというものを簡潔に物語る言葉である。

周五郎は『栄花物語』において賄賂政治家としての田沼の見方を転換させる。それは悪人であったものを善人に描き出すという単純などんでん返しではない。『歴史と文学』で周五郎は「田沼こそ、江戸三百年にわたった幕府政治のなかで、もっとも政治家らしい政治家である」とし、「通説の裏返しを意図したものでなんでもありません」と断言し、次のようにいう。

すこし、注意して資料を読めば、田沼が悪徳の政治家でなかったことが、——田沼を誹謗ひぼうしている資料のなかからさえ——はつきり読みとることができるのであります。

具体的な例として、田沼が旗本あたりから数千両の賄いをとったという資料があるが、同じ時代に加賀や仙台のような大藩でも、数千両という大金はなかったという林子平の指摘を周五郎は紹介している。「田沼の悪徳をあばき立てている資料自身が、明確に、それが嘘であることを物語っているのではないか」と結論づけている。ここには歴史資料に対する周五郎の考えがよく現れているであろう。

また、『縦ノ木は残った』についても、原田甲斐の解釈について、「決して異説をたてようとしたものではありません」と断言し、次のように語っている。

あの事件については、殆どの資料を精密に調べつくした、と断言できると思っておりますが（中略）平凡に、安穩に生きることを願っていた原田甲斐が、その事件の渦中に次第にまきこまれてゆきながら、なおかつ、彼が一個の

人間として誠実に生きぬこうとした人生態度。その態度に私は惹かれたわけなんですけれども、これは、資料を忠実に読みさえすれば、自然にうかび上ってくる甲斐の人間像である筈なんです。

ここには歴史資料という枠組みを超える周五郎の透徹した眼がある。「資料を忠実に読みさえすれば、自然にうかび上ってくる甲斐の人間像」とさりと語っているのだが、ことはそう簡単ではないことは明かであろう。「歴史と文学」において明確に自らの立場を語る周五郎は一九五三年という時期において同時に三作品を執筆することにより、これらの問題について考察を続けていたと言えよう。しかも、日刊新聞と週刊誌、月刊誌という違いもあり、かなりの仕事量であったであろう。しかし、同時に周五郎は多くの困難の中で、逆に様々な試みをなす事ができたということでもある。その意味でもこの年は後の飛躍に繋がる重要な年と言えるだろう。

特に、これから論じていく『栄花物語』は様々な面から代表作『樅ノ木は残った』を準備した作品と言えるだろう。^⑩内容については後に考察するが、たとえば、木村久邇典氏によって明らかにされている『栄花物語』の執筆打ち切りについてである。

木村久邇典氏は『栄花物語』の連載時に「作者にもつと継続したい意欲があつたに拘わらず、編集部要望で、心ならずも後半部は、とにかく首尾をととのえる体裁をとつて擱筆することにした」ことを記し、そこに作者とジャーナリズムの「位置の実態を、ある意味では正直に物語っている」と指摘している。^⑪確かに後半の展開は急である。「埃立つ街」の章における、絹物会所に端を発した一揆の勃発から田沼意知が佐野善左衛門によって殿中で切られ、意次の政策が松平定信によってことごとく否定されるところまで、急ピッチで結末へ向かつて走っていく。

意知の葬列に侮辱を与えられたことを意次が知り、それまでの常に前向きな姿勢から悲観的になり、投げやりの調子に変わる。黒書院での評定においても粘り強く反対論者を説得するというよりも、あきらめの方が先に立っている。これは後の『樅ノ木は残った』の原田甲斐のあの粘り強い、最後まであきらめないで戦い抜いた、より成長した姿として受け継がれていく。そして、この『樅ノ木は残った』もまた、掲載新聞である『日本経済新聞』との最初の予定枚数を遙かに超えて執筆していく周五郎と何とか予定通りに終了したい新聞社との軋轢から、一度の中断を経て、最後は書き

下ろして完結する。再掲載時に、「こんどこそ半年で格好がつくように完成させてほしい」という強い要望に対して、周五郎は木村氏に次のように「吐き捨てるような語調で」語ったという。¹²⁾

「なあと、むこうの意向どおり、何回目の中途であってもブチ切ってやる。さつと刀を振り上げたところで中絶にしたって、いっこうに差し支えはない。だが、半年やって、新聞でこの小説が終わらなくても、あとは書き下ろしでも、おれは絶対に完成してみせる。なぜかなれば、このテーマは、おれがどうしても書かなければならないものだからだ」

はからずも途中で打ち切らざるを得なかった『栄花物語』に対する悔恨とそこから学んだ経験がここには反映されているだろう。それは一作完成するごとに「今度も失敗作だ」と言って、次回こそよい作品を書いてみせると常に言っていた周五郎は『栄花物語』の打ち切りも決して無駄にはしなかったのである。

二 歴史と文学について

木村久邇典氏によって紹介されているように、周五郎は浦安時代に『汚名の冠』という史劇六幕物として田沼意次父子の悲劇を書き進めたが結局、完成できなかった。当時の『青べか日記』¹³⁾には、貧困と将来への不安のただ中で、発表する見込みすらない作品をひたすら書き続けている周五郎の姿がある。書き終えた枚数を記し、順調に進んでいるようにみえるが、また、「うまくゆかぬ」(一九二八年十月十三日)『田沼』書きかけたが失敗した。(中略)『田沼』を三度書き直した。今度はどうやらうまく緒口(いとぐち)をみつけたらしい(十月二十八日)という呻吟の記載もある。しかし、途中から「田沼」についての記述はなくなる。「田沼」が未完に終わった事情について木村氏は次のように指摘している。¹⁴⁾

当時の山本には「田沼」というテーマは、どんなに苦心を重ねてみても、しよせん荷の勝ちすぎた主題だったのであろう。

確かに、このときの周五郎には田沼意次を作品にすることはできなかった。しかし、題材を長く暖め、主題が自ずとか

たちになるまで辛抱強く待ち続けることでは定評のある周五郎はこの作品でも同様であった。『青べか日記』に「西洋美術回顧展」を見た感想を記述し、特に黒田清輝を偉大だと賞賛し次のように書く。

矢張り人は長生きをして為事^{しごと}を完成しなくてはだめだ。若い内は作品は唯^{げんき}衝^{ひらめ}きをみせている丈だ。五十にならなくては本当じゃない。(一九二九年一月二十八日)

まさにこの言葉通り、周五郎は五十歳にして念願の田沼意次の姿を描くことができたのである。

浦安時代から田沼の核心について周五郎の考えはあまり変わっていないと言える。『青べか日記』に「田沼意次」の次のような構想を記している。

余は彼を下司(余の所謂)として、また資本力の解体者として経理家として描こうとする。要点は左の一言にある。

× × ×

意次。『武家の面目?』むむ佳い文字だ、響のある上品な言葉だ、併しそれは食用になるかね

ここにはすでに『歴史と文学』で述べている「江戸三百年にわたった幕府政治のなかで、もつとも政治家らしい政治家」という田沼に対する認識があるだろう。また、武士の大義名分よりも人間の生きる現実を目を注^つこうとする意次がいる。そして、『汚名の冠』という題名にはそれまでの評価と反する田沼に対する周五郎の認識が窺える。

ただ、「下司」という言葉にはいささか注釈が必要であろう。慎重に「余の所謂」と補足しているように、この言葉を周五郎は特別の意味に使っている。「げし」として「身分の低い官人」(『広辞苑』)とも解せるが、やはり「げす」と読むべきであろう。ただし、あくまでも周五郎の考える意味で、である。その解釈に参考になるのが『青べか日記』の記述である。「田沼」が行き詰まったと記した後、「浦島」という戯曲を書き続けていく。一九二八年十二月二十八日に「今日は『うらしま』推敲十枚、『狐』同じく十一枚、やった」と出てくる。続けて二十九日に『うらしま』第一幕推敲が終わった。『狐』第二場が終わろうとしている」として記述されている。

この「狐」とは『戯曲』大納言狐^①であり、一九三〇年七月の『舞台』に掲載された。『舞台』は岡本綺堂監修の演劇雑誌である。この作品は普賢菩薩が現れたと大騒ぎになった摂津の国で、検非違使の別当をつとめた源保が出家した

り、上人が化かされたりするなかで、ある獵人が普賢菩薩は狐の仕業であることを見抜き、矢を射て退治する物語である。この獵人が上人たちから「下司野郎」とさげすまれているのだが、結果的に狐に欺されず、その正体を突き止めるのである。作品では「下司野郎」という言葉が繰り返されている。源保が權威をかさに着て居丈高に振る舞ったり、上人の俗物性が描かれる一方、獵人は人々の熱気に惑わされず、怪しげなものにも理性的に対処している人物として描かれている。このような意味での「下司」として田沼意次も描かれる構想であったのである。

周五郎が『栄花物語』執筆の際に辻善之助著『田沼時代』を参考にしたことが木村久邇典氏によって書き残されている。^①『週刊読売』で田沼意次を書くことに決めた時、「若いときに、参考書はかなりあさって、メモも詳しくとってはあるんだがね。初めのぼくの計画では、六幕ものの史劇にするつもりで、『汚名の冠』という題名まで考えたものだったが、こんどはまったく新しい気持で取りかかりたい」と言い、辻善之助氏から『田沼時代』の借覧を木村氏に依頼したという。しかし、辻氏宅を訪れた木村氏に氏は一冊しかない本は誰にも貸さないことにしている旨を「間の悪そうな語調で、ていねいに拒絶」したと木村氏は記している。そして、数力所の本の所在を教えられたので、周五郎は図書館に通ったということである。^②連載開始に当たつての作者が、「田沼という人はひどく評判が悪い。史学方面でも辻善之助先生のほかは、彼の政治的手腕は認めながら、人間的には不徳漢のように伝えるものが多い」と述べているのは次の理由からだと言っている。

作者が（中略）辻善之助の『田沼時代』に啓発され、田沼意次父子の人と生活に共感・感動したために外ならない。この指摘にはいささか留保が必要であろう。一つ目は、周五郎の田沼に対する認識は『田沼時代』を読む前からすでに核心に近いものがあつたことである。そして、二つ目には辻善之助氏の『田沼時代』は決して田沼その人を周五郎の描くような人物としては描いていないということである。いや、辻氏こそが一般に流布されている田沼賄賂政治家という印象を与えた張本人であるという評価が近年、大石慎三郎氏によって提出されているのである。^③

この二つの指摘は互いに関連している。まず一つ目の指摘であるが、先に引用した『書べか日記』における田沼の構想の直前に周五郎は「参考書が一冊不足だ、石井から借りねばならぬ」と記している。木村氏はこの一冊が『田沼時代』

であるかどうかは確定できないとしている。もし、『田沼時代』だと推測すると、この一冊を読む前に周五郎は田沼意次についての構想をすでに得ていたことになる。その後、この一冊を借りたという記載はない。周五郎が「若いときに、参考書はかなりあさって、メモも詳しくとってはあるんだがね。」と言ったことを考慮すれば、もし、浦安時代に『田沼時代』を読んでいたとするなら、もうすでに詳しいメモがあるはずである。あるいは「まったく新しい気持」で取りかかるときに、もう一度読み直したいと思ったのかもしれない。しかし、その可能性よりも、周五郎は読んでいなかった可能性が高いのではないか。いずれにしても、周五郎が『田沼時代』に「啓発され」て田沼意次に対する認識を得た可能性は低いと言える。

二つ目の指摘についてであるが、周五郎の田沼に対する見解が決して史実からかけ離れた説ではないことが近年の歴史学の成果として発表されている。特に、大石慎三郎氏の一連の論考は江戸時代の見直しと合わせて貴重な田沼に対する再評価となっている。大石氏は辻氏の『田沼時代』がまさに賄賂政治家としての田沼像を定着させた原因であるとしている。その一番の理由は、参照した資料の偏りである。多くは松平定信側の資料から田沼を捉えている故に賄賂政治家としての田沼評を定着させる結果になっていると言う²⁰。

とすると、周五郎が連載の前に「田沼という人はひどく評判が悪い。史学方面でも辻善之助先生のほかは、彼の政治的手腕は認めながら、人間的には不徳漢のように伝えるものが多い」という指摘をどのように考えるかである。『田沼時代』は意次の金権腐敗、賄賂政治家としての悪評を取り上げたが、同時に田沼の経済政策を取り上げ、また、この時代の学問、芸術の発達も指摘し、蘭学の台頭と開国主義の成立まで取り上げた。田沼時代を「新規運の勃興せんとする時代」（三三八頁）であり、「新日本の幕開き」（三三八頁）と捉えている。しかし、結論として、「田沼は政治家として大に採るべき点があるだろうと思う。（中略）しかしながら彼はその手腕に任せて搔乱した。そうして自分が多少私利を圖ったこともあるらしい。そうして徳望が彼の手腕に伴わなかった。政治家は手腕ばかり如何に勝^すぐれても、徳望がなくてはためである」（三四一頁）としている。周五郎は辻氏の『田沼時代』からはその時代の気運を学び取ったのではないか。そして、周五郎が執筆した当時はまさに辻氏の業績ですら田沼擁護であるとみなされるほど田沼に対する見

方が一方的に偏っていたということであろう。⁽²¹⁾

次なる疑問は、なぜ周五郎はそれまでの田沼と異なる姿を描き得たのかということである。これは『樅ノ木は残った』の原田甲斐像とも共通する問題である。周五郎は「田沼氏に対する頑固な悪評のなかに、田沼氏の人間的魅力をつよく感じた」と言う。まさに曲軒の面目躍如たるものがあるが、しかも、周五郎は「それは他の判断を否定するものではなく、単純に私自身の感じ方であるが」と慎重に断っている。これはなんといっても田沼意次自身の資料がほとんど無いという状態のなかで、その姿を描こうとする困難さに向き合った結果であろう。そして、周五郎は優れた洞察力によって田沼の姿を捉え得たことである。

木村氏は周五郎が「きねや質店」の荷車を押しながら、「原田甲斐は悪人ではない」と言っていたことを書き残してくれている。⁽²²⁾ この洞察は後に周五郎が資料を渉猟して作品を書き上げる時に、補強されていくことになる。事情は決して逆ではない。

周五郎が『樅ノ木は残った』連載前に作品の舞台になった宮城県をまわった時の印象記を『雨のみちのく』と題して『日本経済新聞』に発表している。そこで周五郎は歴史上の事実と真実について次のように語っている。⁽²³⁾

歴史上の出来事や人物を小説化するばあい、私がなにより困難を感じるのは「史的事実」のなかでどこまで普遍的な「真実」をつかみうるか、という点である。一般に信じられている史的事実を無視することはやさしい、ときにはそのほうがより真実に近い結果を生みだすばあいもなくはない。もともと「歴史」というやつは必ずらず反対証明の成り立つものだから、これは作者にとってしばしば強い誘惑となる。しかし、それならむしろその「史的事実」からまったく離れること、つまり自分自身の創作をなすに如くはないであろう。

ここには大衆小説の枠組みで「奇天烈超自然」や「ハラハラドキドキ」（『大衆文学芸術論？』）を排し、あくまでも「良い小説」を書き続けた周五郎の基本的な姿勢が表明されている。読者やまた、作中人物の現実在即し、その現実から遊離しないように作品を描き出していく。これは歴史小説に限らず、現代小説においても周五郎の一貫した姿勢である。田沼や甲斐が生活し、自らがなそうとしたことを懸命に成し遂げようとしていた現実に見える限り近づこうとする、

そして、その現実の中へ再び田沼や甲斐を戻してその姿を描き出す。この作業こそ周五郎にとつての小説を書くことに外ならない。

辻氏の田沼像と大石氏の田沼像のうち、周五郎の描き出した田沼意次はどちらに近いかと言えば、明らかに大石氏の方であろう。それは周五郎がより現実在即して田沼意次を描き出したが故に、歴史学の成果により実証されたというところででもある。しかし、当然のことながら歴史学の描き出した姿に近いから『栄花物語』が優れているのではない。周五郎が目指した「普遍性」の故に、「真実」を描き得たが故に優れていることは論をまたないであろう。以下、作品に即して考察していく。

三 信二郎、保之助、その子について

周五郎は連載前の作者の言葉で、「この小説は田沼氏その人を書くよりも、その時代の生活と、周囲の人々を書くことになるようだ」と断っている。そして、「史的事実（というものがあるとして）よりは、その下に埋められ、消え去ってしまう人たちと、その生活。——作者としての私の関心はいつもそこに惹かれる」と述べている。田沼意次についての直接的資料がほとんど残されていないという事情も影響しているであろう。同時に周五郎の関心があくまでも歴史の闇に消え去っていった人々にあることもまた、周五郎文芸の大きな特徴である。そして、言葉通り『栄花物語』は田沼意次を取り巻く人々を描くことにより、意次その人に迫ろうとしている。

その中心にるのが旗本でありながら田沼誹謗の戯文を書いている青山信二郎である。彼は「肉付きの薄いほそおもてで、はつきりした眉と、下唇のやや厚い、への字なりに歪めたくちつきに、冷淡で皮肉な性格があらわに出ていた」と描写されている。青山と昌平坂の学問所で一緒だった関係で親しくなった河井保之助は旗本の三男である。その河井家から四千石の藤代家の婿養子に決まっている。

冒頭「月の盃」の章に山田宗睦氏が指摘するように「この物語の群像がすべて登場して」て、見事な構成である。

月見の宴に信二郎に招かれた保之助はその途上で事件に遭遇する。千吉という若者が日雇い人足から運上を取ることに逆上して刃傷沙汰を起こした。千吉の女房が事態に混乱して茫然自失になっていたのを保之助が助ける。その顛末を信二郎に語ったときの二人の会話に青山と河井の特徴がよく現れている。千吉（後の盗賊稲葉小僧）が「どうしても叫ばずにはいられないことを叫んだ」という保之助はその行動が止むに止まれないものであると理解を示す。しかし、青山は二割の運上を取るといふのは怪しいという。その人間たちは役人ではない、雇い主が人足たちをだましていると断言して、保之助の認識が現実を見ていないことを指摘する。世の中のからくりを知らされた保之助は「そんなことがわかる筈はないじゃないか」と反論すると、信二郎は「わかうとしなからさ（中略）ちよつと考えたつてわかる筈じゃないか」と取り合わない。怒りの眼で信二郎を見ながら、「じゃあ、どうすればよかったというんだ」と言う保之助に信二郎は冷ややかに「まあどうしようもないだろうな、人間を搾る手段にかけては、やつらは悪魔の知恵をもっているし、搾られる人間の種も尽きないからな」と突き放す。それで平気でいられるのかと問われた信二郎は次のように言うのける。

「おれか、——おれはその話でひと儲けするよ、使える話だからね」

これらの会話から保之助の謹厳実直で真正直な性格と、世の中を斜に見てどこか拗ね者的な信二郎の対比がよく窺える。青山が催した宴には色々な人間が集っていたが、保之助は彼らを軽蔑していた。一方で彼らは保之助を「儉約な箱入息子」と綽名していた。保之助が最も嫌っていたのが佐野善左衛門である。彼は「すべてが下品で卑しく」みえる「貧相な顔」をしていた。そして、「自尊心が強くせに、ひどく他人の顔色を気にして、なんでもないことにすぐ怒った」という人物である。その佐野が田沼に取り入って奏者番の役をもらうために自身の系図を差し出し、知行所にある佐野大明神を田沼大明神と直したことを自慢げに吹聴した。その話を聞いた保之助は「なんという卑しい、見下げはてやつだ」と皆が聞こえるように言う。佐野は刀を抜いて、激高するが、青山にやりたければ時と場所を決めて決闘しろと言われる。決闘を申し込んだ佐野がその後、何も言っていないことについて保之助は「やるのかよすのか、はつきりさせておいたほうがいいと思うんだが」と信二郎に言う。信二郎は佐野が「本当に果合なんぞでできる男じゃない」と言い、

ほとんど相手にしていない。しかし、保之助はこのようなことにも「はつきり」させたいのである。あくまでも黒白を明確にしたいのである。信二郎は世の中はそのように明確には割り切ることができないと考えている。このような点にも信二郎の現実感覚と保之助の世間知らずが現れている。そのような保之助に青山は「人間が善良であることは決して美徳じゃない」と断言し、「自分の良心を満足させることはできるが、現実にはなんの役にも立たない、そのうえ周囲の者にいつも負担を負わせるんだ」（「狩の行事」その四）と忠告する。

そして、この二人の間にその子がいる。その子は信二郎と男女の關係にあり、作品は二人の逢い引きの場面から始まる。二人がいるのは大川の中洲にある料亭「やなぎ」である。その子は十八歳でありながら「おどろくほど嬌かしい媚」があり、性的に奔放な性格である。しかも良心の呵責といったことから自由である。「恵まれた環境で、拘束されずにそだった者の、自由でしぜんな媚」を身につけている。信二郎はその子を「なにものにも汚されたり濁されたりすることはない」と見ていて、次のように言う。

「人間が自分から好んですることには罪はないんだ、自分がそうしなくては、その人間にとつてはすべて善なんだ。反対に望みもしないことを望むようにみせたり、自分で信じていないことを信じているようによそおうことこそ、罪であり悪というんだ」（「月の盃」その二）

そんな生き方のできる勇気ある人間はわずしかいないと言う。その子の存在は『栄花物語』において特異である。作品前半ではその存在感は際立っている。青山の皮肉な言葉や行動でさえもその子には通用しない。

信二郎と保之助は親友でありながら、田沼意次に対する考えは違っている。保之助は正義感から世間に流布されている田沼誹謗の評判を信じ、田沼に対する憤りを抱いていた。松平定信の意向を受け、田沼たちの不正をあばくための調査を続けていた。しかし、いくら調べても不正につながる証拠は出てこず、「相良侯の汚名は作られたものだ」と考えるようになる。信二郎は自らが田沼誹謗の瓦版を書いていることもあり、世間の評判をそのままには受け取っていない。彼ら二人は田沼の真実の姿に徐々に近づいていく。その間にいるその子はこれらの動きと全く関係のない自らの欲望に素直な存在として描かれている。竹腰幸夫氏はその子を含めた作品の構図について次のように指摘している。²³⁾

(略) 一方に政治家としての信念に徹底して生きた田沼意次を、そして一方に自然な女としての生き方、(美しいけどもの)を貰いたその子[、]を配して、その間に、策略や栄達や熱い正義感、くじける道義、そして尽くす愛、裏切られる心などがめまぐるしく回転する、という構図を持つ。

意次とその子という対照的な人物を両極に配し、その間を信二郎や保之助が行動するという構図は確かに周五郎の意図したものであったであろう。この後、信二郎は保之助から婿に行く相手が藤代その子であることを知らされる。衝撃を受けた信二郎はその子にもう会わないと告げるが、その子は保之助と親友であるということで逆に欲望を煽り立てられる。激情に駆られた後の信二郎は「罪の自覚をはつきりと感じる」がその子は「そんなにも親しい二人の友を、同時に自分のものにできるといふ、強烈な刺戟^{しげき}」に圧倒される。その子は「常識的にみれば、放埒^{ほうちやう}で不道德なことを、少しも良心の咎^{とが}めなしにやることができ」女性である。婿を取ることが決まっても信二郎との関係を平気で続けていた。その理由を次のように信二郎は受けとめていた。

——それとこれとはべつだ。

そう割りきっていた。自分をごまかすのではなく、心からそう割りきっていたのである。しかもそれは、彼女のばあいにはいかにも自然であった。いつてみれば、いかなる放埒無恥な行為も、彼女のばあいにはそのまま自然であつて、少しも彼女を汚したり傷つけたりすることができない。——精神的にばかりでなく、肉体的にも、彼女はいつも新鮮であり、自分の意志にしたがつて開放されていた。彼女に良心を求めたり、道徳を押し付けたりしても徒勞である。彼女には彼女の良心があり道徳があるのであつた。「夕顔の少将」その一

このようにその子を受けとめる信二郎は善悪の基準は法律や世間の常識に求めることはできないと考えている。社会の掟を無視しているかのように見える信二郎でさえ、その子に敗北を感じる。保之助とその子が結婚したあとのことについて真剣に思い悩んでいたことをその子に笑われたとき、信二郎は自分自身がむきになっていることに気付く。彼にとつてはむきになる人間ほど滑稽なものではなかったのである。信二郎は三人のこれからを考えたときに、その子を殺害することまで考えるが実行できなかった。

「冬のちまた」の章においては、凶状持ちになった千吉が女房のおさだに別れを告げにきて、五十両を残し家族と縁切りをする。保之助は残されたおさだ、と子供のために事件の後世話をしていたが、五十両は「なにか罪を犯して作った金、だと思う」と信二郎に言い、もしそうだとしたら河井はどうすると問われた保之助は「むろん、その金を奉行所に届けさせるさ」と答える。杓子定規ではあるが、確かに正しい対応であろう。もし千吉が捉まったら、その時家族の罪が重くなるから、そのためにも届けておくべきだというのである。その保之助に信二郎は「罪は人間と人間とのあいだにあるもので、法と人間とのあいだにあるものじゃない」（冬のちまた）その三」と言う。保之助は側女のお滝を狩場助ける時にこの言葉を思い出し、定信を裏切る一步を踏み出す。また、山田宗睦氏が指摘しているように、意次もまた自らが進んで困難な道を選び取ったのである。信二郎をはじめとしてこれらの人々はいずれも滅びていく。その端緒はそれぞれの意志で選び取ったのである。ここに周五郎が『栄花物語』において描かんとした悲劇の構造を見て取ることができよう。その中で、唯一滅亡に至らないのがその子である。この意味でもその子の存在は際立っていると言っている^⑩。

四 田沼意次について

田沼父子を誹謗する多くの戯文や落首を作っていた信二郎は「身分の高い或る人物」の「うしろ盾」により資金の提供を受けていた。しかし、彼は同時に「田沼はそれほどばかな人ではない」とも思っていた。そして、中洲の「やなぎ」で臨検にあい大目付から出頭の通知がきたとき、田沼が「権勢並びなき人」として臨んできて「望むことを望むようにできる人」であることを認識させられる。しかし、田沼意次と直接対面した信二郎は田沼に対して「ふしぎな親近感がわきごくしげんに、微笑がうかんだ」のである。それは田沼誹謗の文書を信二郎が書いていることを述べた後でも、お互いの「心と心のかよいあうような」二人の会話であった。信二郎は「相当なものだ、どんな汚名をきせたところで、あの人を傷つけることはできないだろう、——想像したとおりだった、会えてよかった」（汚名の人）その三」と田沼

の真の姿を認識する。

その後、信二郎は松平定信の屋敷に呼び出される。そこで家来たちから田沼に受けた尋問の内容を質される。また、信二郎の田沼に対する誹謗・中傷が「田沼の悪徳を諷するよう」にみせながら同時に、じつは『無根の誹謗』であることを証明するものだ」と批判される。その問答の途中で「夕顔の少将」松平定信が登場する。周五郎はその姿を次のように描く。

そのとき定信は二十六歳であつた。⁽³¹⁾おもな色で色が白く、高くてひろい額や、よく澄んだ眼や、ひき緊まつた小さな口もとなど、さすがに気品があるし、またいかにも博学で聡明そうにみえた。「夕顔の少将」その四)

定信に対して信二郎は頭を下げることをさえない。対等以上の無礼とも取れる物言いをする。それは信二郎が天下の直参であり、石高は違えど將軍に対する立場は同じことからきている。定信は信二郎を御進物番に取り立て御鷹野にお供するように依頼する。定信は「田沼一派は退陣しなければいけない、私はずっとまえからそう信じていた、彼は幕府の威光を墮し、政治を混乱させ、綱紀を紊し、秩序を破壊してしまふ、見るに耐えない」と「按配された怒りの調子」で言い、田沼を刺そうとしたことさえあると語る。この「按配された怒り」は千吉の凄まじい怒りとは別のものである。信二郎は定信の話に全く共感せず、しかも、定信の依頼を拒否する。それが田沼暗殺の計画であつたからである。断れば自らの命が危険であることを承知しながらである。予測通り定信邸を下がつてすぐに刺客に襲われる。その窮地を救つてくれたのが田舎小僧の新助という二つ名の盗賊になつていた千吉であつた。

田沼意次の政務について筆頭老中だから呼びつけてもいいのに、評定の席に自分から出向き、「格式とか順序などはいいて二の次」であり、「事務のはこびが第一、時間が大切というのである」と合理的精神の持ち主として周五郎は描いている。保之助はそのような意次の姿を城中で眼にするたびに今までの自分の考えに疑問を抱くようになる。そして、「困難な立場に立つても決してめげないが、自分の主張をおすばあいにも固執するふうがな」く、「そうでもあらうが、ともかくやるだけやってみてはどうだろうか」というぐあいにまとめるのである。田沼は「大奥の女官たちにも好かれているという」(「狩の行事」その一)と描き出している。⁽³²⁾

意次のゆがめられた悪評に対して、しばしば潔癖な人として館林侯が引き合いに出された。その館林侯松平武元につ

いて「毎朝、儒臣に論語の一章を講義させて、それから登城する」という話を聞いて、「意次は決して他人の評をしない人であつたが」このときには、「いかにも館林侯らしいな」と言い、「論語の一章を聞いて、安心して登城できるとは仕合わせな人だ」（『あだ化粧』その一）と独り言のように言つたのである。それは「論語」に逃げ込むことをせず、現実に向き合う意次の姿をあらわしている。側女のお滝にはその言葉が深く心に残る。また、お滝は意次と意知がまるで友達同士のように語り合うのを何度も目の当たりにする。そのような意次にお滝はどんどんと惹かれていく。

お滝は意次が命を狙われていることを知り、狩のお供をやめ、そして老中もやめてもらいたいと訴える。意知も「よき折をみて隠退していただきたい」と言うが、意次は「幕府が潰れてもか、——武家政治が亡びてしまつてもか」と静かに反問する。激して、声高に主張するのではなく周五郎は「静かな、しみいるような口ぶりであつた」と描く。そして、反対する人々についての次のような考えを語る。

「御三家はじめ俊英といわれる白河殿までが、た、たもう御威光と名分を無上のものと思つて（中略）復古、あの人たちの理想はいつもそれだ、この世にあるものは絶えず新たに、休みなく前へと進んでいる、元へ返るものなご決してありはしない、しかもあの人たちの理想はいつも復古なのだ（中略）いや、私は隠退はしない、どんな悪口雑言もあびよう、いかなる汚名も衣よう、私は踏みとどまる、力のある限り、私はこの席でたたかつてゆくつもりだ」（『あだ化粧』その五）

ここに周五郎の描く田沼意次の姿が明確に現れている。多くの困難の中、いわれなき悪評を受けても自らのなすべきことをなしとげようとする。命を狙われても成就しようとするのである。そのために「命を惜しむ」のである。狩場で新吉が狙撃した時、幸い弾はそれが意次が「ひ、や、つ」と悲鳴をあげた臆病さを人々は嘲笑する。しかし、保之助はその後、意次が最初の計画通りに印旛沼の踏査を行つたことに意次の人間としての優れた一面を認める。「なまみの軀」（花のうわさ）その四）を持った人間であれば死は恐ろしい。この当然の考えを武士の面目という大義名分によって押し込め、死を恐れないことがあたたかも勇氣であるごとく錯覚している、そのような風潮に周五郎は異議を唱えるのである。意次は武士の魂である刀さえ廃すべきであると考える。それは「凶器としか考えられなかった」（『慥かな足音』そ

の二)からである。

定信たちの復古主義に対する主張は絹物会所についての田沼の考えにも現れている。絹織物に対する課税役所であるこの組織は御用金や冥加金という一時しのぎの資金ではなく、商人たちに支配されている経済にくさびを打ち込み、安定した利潤により幕府経済の将来を明るくするものであった。しかし、商人たちはその意味を熟知しており、織元たちの影で意次の政策に反対している。松平定信は幕府の威信を掲げて意次の政策に反対する。粘り強く説明する意次に對して定信は次のように言い放つ。

「資本、利潤、経済」と定信は吐きだすように云った、「筆頭老中ともある人の口から、そのような言葉を聞こうとは思わなかった、まるで、——まるで商家の手代のようだ」

そして嘲笑の眼で相手を見、長袴をきれいにさばきながら、定信は去っていった。(「狩の行事」その二)

定信は作品に登場する最初からその姿は颯爽たるものである。ここでも意次の合理的な判断にもとづく政策を「商家の手代」という侮蔑した一言で切って捨てる。そして、まるで歌舞伎役者のような姿で去っていく。周五郎は徹底して定信をこのように描き出す。絹物会所から高崎で一揆が起こり、白書院で評定が行われたときにも、意次は騒搔の件について評議すると思われていたところに突然、新しい案件である金銀会所を持ち出す。これも安定した金融機関の設置により破綻しかけている武家経済を立て直すためにどうしても実現しなければならない政策であった。本来は評議に出席する資格のない定信は御三家の威光を盾に意次の政策は幕府を冒瀆するものであり、武家全体の名誉と誇りを汚すものだと言張する。その定信に対して意次は冷静に退出を求める。退席に応じない定信に殿中法度に触れると告げた意次に定信は「御政治の大事に眼をつむるより、私はよろこんで法度に触れるほうを選びましょう」(「白書院評定」その四)という。いかにも壮烈でまさに正義は我にありと言わんばかりである。しかし、その定信は陰で意次の悪評を流布し、また、その命までも奪おうとしているのである。それは正義の実現のためという大義名分に裏付けられているのかもしれない。しかし、現実から遊離した主張を声高に叫ぶ定信の姿は、山田宗睦氏が指摘するように周五郎から徹底して「いつびどくあつかわれている」のである。つづけて山田氏は次のように言う。^③

その品格、風貌ふうぼう、威儀を、作者は、かえつていやしめることなく描いているが、そうであればあるほど、その威儀が、出自が、どれほど守旧的であり、絶望的なものであるか、おのずとあらわれるようになっていく。

『栄花物語』において意次と定信の対比が最も鮮やかであろう。定信の颯爽とした姿が際立てば際立つほど、意次の実りなき徒労感が増す。白書院での評定で定信が退出した後も、意次は粘り強く説明を続けるが列席の重臣たちは誰も理解を示そうとはしない。反響の低調さと無氣力に意次は失望する。勘定奉行であり、意次の腹心である松本十兵衛に意次は「今年は花を見ようと思っていたが」と独り言のようにいつて、次のように吐露する。

「もう忘れるほど昔から、来る年も来る年も、今年こそ花を見ようと、思いながら、——考えてみると庭の花を見るいとまもなかった、これは御奉公大事というよりも、私自身の好みかもしれない、——これからも、生きている限り、こういう生活が続いてゆくことだろう、こういう生活のほかに、私には生きることができないのかもしれない」（『白書院評定』その五）

ここに周五郎が田沼意次その人に託した思いが現れているであろう。花を見るいとまもなく、幕府経済の立て直しに懸命に努力したにもかかわらず、残されたのは汚名の冠であり、賄賂政治家という悪評である。周五郎が作者の言葉として『栄花物語』という題は、その反対のものの逆説と受け取って頂きたい」と言った核心である。そのような生涯がまさに栄花なのである。定信のように颯爽とした姿で声高に正義を叫び、世にも名君として喧伝されている人生が栄花ではないのである。

お滝が意次の暗殺計画を知り、將軍の狩場に意次の六男雄貞ゆうていに化けて侵入し敵方に捉まってしまう。その際に胸を触られて女性であることがばれる。暗殺者たちは卑劣にも自らの欲望のままにお滝の胸をもてあそぶのだが、お滝は次のように思う。

——こういう人間が、天下のためだなどと云って、殿さまのお命を覗うのだ。（中略）——どんなことでもやつてみるがいい、それで汚れるのはあたしではなくおまえたち自身だ、さあ、好きなようにどうでもしてみよう。

（『小金ヶ原』その六）

大義名分を掲げ、正義を実現するというスローガンの下に卑劣な行爲をなす、そこに周五郎は人間としての頽廃をみている。意知を切る佐野善左衛門も自らの立身を望み意次に取り入ろうとするが、叶わないと知ると今度は一転して誹謗中傷する。己の私憤を公憤とすり替え、正義のために切ったと主張する。松平定信もまた、幕府の御威光を口にするが本心は成り上がり者の意次に対して自らの出自を誇る気持ちが根底にある。政策の適否ではなく意次そのものに対する嫌悪感により反対する。このような複雑な社会の軋轢の真相を周五郎は見事に描き出していると言える。

拉致されたお滝は保之助の機転によつて救出される。しかし、保之助は逆に定信一派から付け狙われることになり、地位も危うくなつてしまう。そのような時に、その子が他の男と密会している現場を見つけ、その部屋に足を踏み入れる。だが、何も言わずに立ち去る。傷心の保之助を慰めるのが藤扇である。保之助と藤扇は吉原の大火を契機に足抜けし、心中にまで突き進んでいく。

周五郎は二人の道行きを美しく描くことをできる限り避けている。死を美化しないという考えからである。雨に濡れ、泥まみれの足で渡し場の小屋にたどり着く。畳も建具もなく、隙間から吹きぬける風が鳴る小屋で二人の死体が発見される。そこには一人の人間だけではどうにもならない力が働いている。二人を引き合わせた信二郎は心中したと聞いて次のように思う。

——とうとう負けちゃったのか、保さん、断つておくがこれはその子の罪じゃあないぜ、めぐりあわせが悪かったんだ、おまえさんがその子と夫婦になったこと、おふくと会ったことが不運だったんだよ。（ぬかった道）その五しかし、信二郎は思い直し「人間と人間との交渉は、つねに他のなにかの支配を受ける」と考える。それまでの展開で少しでも違った道を取っていれば保之助は心中という結果には至らなかつたであろう。それは歴史の「もし」である。もし、保之助が小金ヶ原の狩場で定信を裏切るようなことをしなければ、また、絹物会所が設けられなければおふくは身売りしませんでしたであろうし、保之助と出会うこともなかつた。その絹物会所は定信によつて廃止される。そして意次が変わつて定信が政治の実権を握る。信二郎は二人の力量について次のように思う。

政治家としての才能や実力の点からすれば、両者の差は比較にならぬほど大きいし、田沼氏にはなお期待すべき多

くの新しい政策があるに反して、白河派の復古調と緊縮主義の将来するものは、すでにして底がしれている。にもかかわらず田沼氏はしりぞけられるであろうし、定信はよろこんで迎えられようとしているのである。なぜだろうか。(ぬかつた道) その五

この「なぜだろうか」は周五郎が「歴史」に問い続けたものであり、現実の社会において人々が常に感じる疑問であろう。合理的に社会が進んでいくのではなく不合理としか考えられないような事態が出現する。そのような現実に出会った時に抱かざるを得ない疑問である。信二郎は続けて思う。

「その子と保之助とおふく、の關係が、その不運な組み合わせだけではなく、他の条件の支配を受けているように、田沼氏と松平氏との不合理な交代も、各自の才能や実力とはべつな、なにかの条件の支配を受けているんだ」

それぞれの才能や実力だけでは推し量ることのできない様々な条件によってその人の社会での役割が決せられる。意次の政策が革新的であり、幕府経済の立て直しに有効であったことは間違いない。しかし、それらはことごとく退けられ汚名だけが残された。なぜ、このような不合理が許されるのか。ここに周五郎の『栄花物語』における問い掛けが集約されている。

保之助の死は信二郎を「悲しませるより、むしろ新しい力を与えたようであった」と周五郎は記している。そして、信二郎は若年寄りへ出頭する決心をした。「その結果がどうなるかわからないが、現実を逃げて不安定な状態をつづけるよりは、当面すべきものに当面し、傷つくものならば傷ついて、しっかりと自分の足場をきめるほうがいい」と思う。そして、次のように考える。

この世に生きている以上、あらゆる者が無傷ではいられない。(中略) 相良侯は傷だらけにされ、汚名の冠をきせられた、しかも侯はいまもなお自分を投げようとはしない、四面楚歌^{そか}のなかに在って、すでに敗北とわかっていながら、なお自分の陣に踏止って闘っている。

この信二郎にも追手の影が忍び寄っている。登場する多くの人々はあたかも歴史の闇に消え去っていくかのごとく姿を消していく。その消え去っていった人々の思いを周五郎は描き出す。周五郎は途中で打ち切りざるを得なかった『栄花物語』の最後に意次のなお、倒れないで踏み止まり、闘っている姿を信二郎の述懐として描き出した。田沼意次の姿を通して、誠実にその人生を生きた一人の人間の姿が甦っていると言えるだろう。

注

- (1) 木村久邇典氏は「附記」（『風流太平記』山本周五郎全集第六巻 新潮社 一九八三年五月発行）において「この作品は他の数社もだいたい時を同じくして連載したが、正確な掲載社数は現在のところあきらかではない」（三〇一頁）としている。
- (2) 河盛好蔵「解説」『風流太平記』（山本周五郎小説全集4 新潮社 一九六九年十二月発行）引用は一九七七年二月版による。五三三頁。
- (3) (4) 注2と同じ。五三三頁。
- (5) 水谷昭夫「解説」新潮文庫『風流太平記』（一九八三年九月発行）五八六頁。
- (6) 「小説『よじょう』の恩人」『完本山本周五郎全エッセイ』（中央大学出版部 一九七四年十二月発行）所収。後に、新潮文庫『小説の効用・青べか日記』（一九八五年四月発行）に収録された。引用は文庫本による。一四七頁。
- (7) 「作者の言葉」注6と同じ書に所収。引用は文庫本による。一七〇頁。
- (8) 『歴史と文学』注6と同じ書に所収。以下の引用は文庫本による。
- (9) 縄田一男『未発表「山本周五郎」日記④』（『新潮45』一九九八年一月号）から一九三八年十一月二十二日の箇所を引用。一四二頁。
- (10) 山田宗睦氏は新潮文庫『栄花物語』の「解説」で「内容的にも『縦ノ木は残った』の先駆作」と指摘し、詳細に二作品を論じている。（引用は一九七四年版。）五〇八頁。
- (11) 木村久邇典「附記」（『栄花物語』山本周五郎全集第七巻 新潮社 一九八二年二月発行）三〇〇頁。
- (12) 木村久邇典『山本周五郎横浜時代』（福武書店 一九八五年十一月発行）後に福武文庫『山本周五郎—横浜時代』（一九九〇年七月発行）として刊行。引用は文庫本による。一八六頁。
- (13) 注11の「附記」。
- (14) 『青べか日記—わが人生観』（大和出版 一九七二年九月発行）後に注6の文庫に収録。引用は文庫本による。周五郎は年号に

「皇紀」を使っているが、引用に際し西暦に改めた。

(15) 注11の「附記」。二九七頁。

(16) この戯曲は後に、『大納言狐』として小説に描き直され、一九五四年十月に『週刊朝日別冊』に掲載される。それについて木村久邇典氏が「劇作がいかにか散文化されていったかを窺ううえでも興味つきないものがあり、対比併読をすすめた」(新潮文庫『夜明けの辻』解説)とし、また、「戯曲から小説への変形まで、実に四半世紀の反芻がおこなわれたわけである」(新潮文庫『つゆのひめま』解説)と指摘されている。同じことは戯曲『汚名の冠』から小説『栄花物語』についても言える。

(17) 注11の「附記」。

(18) 木村氏の指摘(注11の『附記』)にもあるが、辻善之助氏の『田沼時代』には二種類ある。一つは一九一五年に日本学術普及会から発行された版であり、二つ目は一九三六年二月に同所より再刊されたものである。木村氏は「大正十一年」としているが、これは「昭和」の誤りである。この版は一九八〇年三月に同書が岩波文庫に収録された時の底本である。木村氏は「山本周五郎が読んだ『田沼時代』は、最初の大正四年版のものか、大正十一年版のものか分明でない」とされながらも、「大正十一年版を読んだものではなからうか」(二九七頁)と推測している。一九三六年版は入手できなかったが、岩波文庫に辻氏の再刊の辞が載っており「若干の誤謬を訂正して、剽竊に附することとした」(四頁)とあるように、大きな変更はなかったと考えられる。なお、以下『田沼時代』の引用は岩波文庫版によった。

(19) 大石慎三郎『田沼意次の時代』(岩波書店 一九九一年十二月発行)や同『將軍と側用人の政治』(新書・江戸時代① 講談社現代新書 一九九五年六月発行)にその成果が窺える。大石氏は『田沼意次の時代』で辻氏が使用した資料を検討した結果、「田沼意次についてこれまで紹介されてきた『悪評』はすべて史実として利用できるものではない」(五四頁)と指摘している。また、最近では大石氏を批判的に論じている藤田覚氏の見解も示されている。(藤田覚『田沼意次』ミネルヴァ書房 二〇〇七年七月発行) 藤田氏は大石氏が信憑性がないとして一蹴した「史料の吟味が求められる」とし、「時代が意次を創り、意次が時代を創った」ことを明らかにしたいと述べている。六頁。

(21) 木村氏も紹介している(注11の『附記』)が、岩波文庫に佐々木潤之介氏の「解説」で、辻氏の『田沼時代』が発表された当時、

松平定信らの田沼批判が継承され、支配的な評価であり、「官学歴史学」の評価であったと指摘している。その中で発表された『田沼時代』の意義を明らかにしている。

- (22) 木村久邇典『山本周五郎青春時代』（福武書店 一九八二年九月発行。後に福武文庫『山本周五郎―青春時代』として一九九〇年に刊行。引用は同文庫による。）木村氏は周五郎のまたいとこの秋山青磁が記した回想記を引用している。その中で、店員時代に荷車を引きながら「原田甲斐は悪人ではない、いつか俺はこれを小説にかく」とよく言っていたという。二〇九頁。

- (23) 注6の『完本山本周五郎全エッセイ』に収録。後に新潮文庫『雨のみちのく・独居のたのしみ』として一九八四年十二月に刊行。引用は文庫本による。一〇頁。

- (24) 本文の引用は『栄花物語』（山本周五郎全集第七巻 新潮社 一九八二年二月発行）による。

- (25) その藤代家の当主を「藤代外記という四千石」と設定しているが、これは『田沼時代』に「第三 土風の廃類」で天明五（一七八五）年に遊女と心中をした寄合の名前「藤枝外記」の「枝」を「代」にし、保之助の養父の名前にしている。そして「領邑四千石」もそのままである。（七九頁）大井公介が記している（講談社版『山本周五郎全集第二巻』『解説』）ようにこの心中事件は有名であり、外記と綾衣の『箕輪の心中』として岡本綺堂が歌舞伎の戯曲として描いている。周五郎も当然この戯曲を読んでいたであろう。

- (26) 注10の「解説」。五〇六頁。

- (27) この場所の説明には『田沼時代』が参照されている。「四季庵」という料亭の名前もそこには記されている。（一〇二頁）ただし、『田沼時代』以外の記述が作品にはあり、他の資料を周五郎が参考に使っていたことがわかる。

- (28) 竹腰幸夫『栄花物語』（『国文学解釈と鑑賞』至文堂 第五三巻四号 一九八八年四月）八〇頁。

- (29) 山田宗睦 注10と同じ。山田氏は「花をみるひまもなかった『栄花』の生活をえらんだのを、意次が、それは自分の好みだし、こういう生き方しかできないといっているのも、おもしろい」とし、「意次が、それを自分の好みでしたということは、この物語の冒頭で、信二郎がその子にいうつぎの言葉と、みあっている」と指摘し、「人間が自分から好んですることに罪はないんだ」の箇所を引用している。五〇五頁。

(30) その子^こは『五瓣の椿』の主人公であるおしのの母親「おそ^{おそ}」として再び登場するといえる。それは名前の一致だけではない。自らの欲望のままに行動し、まわりの人々を不幸にする。そのような人間をおし^{おし}のは「父」の名において復讐していく。周五郎は倫理的な裁きをおし^{おし}にはたさせるのであるが、『栄花物語』のそ^その子^こに対してはそのような判断を下していいのではない^か。

(31) この定信の年齢設定は全集において変更された。周五郎の描いた年齢は「二十五歳」である。この変更がどのような考えによるかは明らかではないが、注34に記したように周五郎は時代設定を大胆に変えている。定信の年齢だけを変える必要があるのか疑問である。

(32) 大奥との関係については『田沼時代』では「そもそも田沼が此^{かく}の如く勢力を得るに至ったのは、初に大奥との結托がよほど密であつたらしい」(一三頁)とし、「田沼の出世というものは一部分は大奥との聯絡が付いておつたという事は、推察が出来るのである」(二四頁)と指摘している。しかし、周五郎は意次の人間的魅力を強調している。

(33) 大石慎三郎氏はこの松平武元についての辻氏の取り上げ方に問題があると指摘している。それは獵官運動に加担して収賄にはげんだ人物として田沼意次だけを抜き出すのは軽率であると指摘し、辻氏が「松平武元を(中略)清廉潔白な善玉としておきながら、田沼意次のみを悪玉とする論拠に『伊達家文書』を使うというようなことは、歴史家としてはとるべきことでないであろう」と手厳しく批判している。『田沼意次の時代』四九頁。

(34) 大石慎三郎『田沼意次の時代』に『栄花物語』についての記述がある。その中で大石氏は周五郎が歴史的事件を「時日をかまわず効果的にとりこんでいる」と指摘している。(一七七頁)天明元年の絹糸改会所の設置とそれに対する上州・武州の一揆、また貸付会所設置(案)、印旛沼開発や、本来は田沼失脚後の天明七年五月の江戸での打ち壊しを連続した日に起こしたものとしている。また、大石氏は作中の稲葉小僧についても実際の人物との対比をしている。大石氏の指摘以外に周五郎が時代を前後した例として、島津家の老職小松帯刀が意次に貸付会所案について進言する場面を描いている。(「白書院評定」その一)小松は幕末の人物であるので、現実にはありえない。執筆時は現在ほど幕末に注目が集まっておらず、小松帯刀も人々には知られていなかったということがあるだろう。また、周五郎が小松という人物に注目していたという推測も可能であろう。

(35) 註10の「解説」。五〇六頁。

(36) 雄貞ゆうていは天明二年に死去しているので、これも大胆な設定である。後藤一朗『田沼意次』（清水書院 一九七一年九月発行。後、『田沼意次その虚実』として清水新書で再刊。引用は前書による。）に田沼家系図が掲げられていて、そこに六男「雄貞かつさだ」の記載があり、「天明二年十一月孕」と記されている。一九六頁。

(37) 保之助と藤扇の二人は『樅ノ木は残った』において新八とお宮として描き出されていると言えるのではないか。追いつめられた状況の新八とお宮が多くくの挫折を経て立ち上がり、二人で生きていく姿に成長していると言える。

付記

元就実大学教授・福本彰氏より後藤一朗『田沼意次』（清水書院 一九七一年九月発行）の提供を受けました。また、四国学院大学教授・岡俊二氏より辻善之助『田沼時代』（日本学術普及会 一九一五年十二月発行）の所在について情報をいただき、入手することができました。両氏に深く感謝いたします。